

である。絶對愛は神的本原の内容たる觀念的一切である。絶對善は絶對愛であり、神である(九八—九九頁)と。吾々はこの翻譯がどこまで原著の眞髓と風采とを傳へたるものかは断定することができぬ。たゞ未知の偉大なる思想家の紹介者として譯者の勞を思ふのみである。

因みにルーリエの本からソロウイヨフの主なる著書の名だけを紹介して置かう。

西歐哲學の危機、善の辨明、神學の過去及將來、抽象原理の批判、正義と道德、生命の精神的基礎、三の說話。東京、洛陽堂發行。壹圓貳拾錢。(中川得立)

## 滅び行く宇宙及び人類

兒 玉 昌 著

『天の星、地の動くもの、間、萬象の後に、宇宙の目的人生の歸趣なるものを求めて止まない』著者は、四六版四四四頁、處々に挿語も入れた此書の前編に、宇宙の構造と其將來を論じて『其の勢力根源は何れにもせよ、一般勢力の原則に従つて、太陽勢力と雖も、早晚盡きる時があらねばならぬ。事實宇宙間に於ける白星、黄星、赤星の存在は、目前之を證明するのであつて、假令、カントの想像したるが如く、又新星なる現象の示すが如く、一旦冷却消滅したる太陽の再び燃え上ることありとするも、而も全宇宙勢力の大勢は滔々として彼の萬物を溶融して止まざる熱死の一大澎湃に向つて注ぎつゝあるのである』と言ひ後編、人類の過去と未來を考へて、『總ての生物の作用、従ひて文明現象も、之を勢力の側から見れば、エントロピーを増加して、宇宙最終の状態た

る熱死の構成に努力しつゝあるものに外ならない。』と言ひ、『自分は、かくして全宇宙を擧げて歩一步一大涅槃の狀態に近づくものと観するのである。眞の天國は茲に見出され、眞の寂光淨土は茲に存在しなければならぬ。』『既に勢力不均に依つて現出したる森羅萬象である……憂の巷、備みの蔭ならざるなきも其故なりとすべきであるが……唯宇宙を以て苦惱そのもの、悲痛それ自らと観する所に於て、却て一道の光明を認め、必然の運命に隨順して滅び行く萬有の流れに身を托する所に、却て無礙自在の境涯ありとする。』

誰れがこの見るべからざる宇宙の果てに對する一人の提説を——自分は夫れを欲すると言ひ若くは欲しないと云ひ得る外に——俄に是と言ひ非と言ふ事の出来るものが有らう。著者自らの様に『人の生まるゝを以て憂の始めと』する人々は憧れの心に靜寂な宇宙の死を畫き、逃れ得た人の涼しさを以て『眞の天國』として欣び迎ふべく又生きんとの願ひ飽までも盡なるものは、其生きんとの執着を、吾れと、吾が想見し得る子孫の關知すべからざる世の末にまでも延伸して、『我』は永遠に亡びはしない、エネルギーが働くと云ひ、消滅すると言ふ、皆た『我』の一の方式に過ぎないと信じ、奴方共に研究と思索を通じて、其信念を明かな理論の現證に持來さうと欲するであらう。良し其天性が、彼れの思想をどの方向に傾けさせやはしても、眞率な態度に於てかうした考察に向はうとする限り彼れは必ず、この熱心な態度に於て提出された一説を慎重に熟讀すべき筈であり、そして又、必ず何等かの意味に於て彼自らの研究に寄與する或るものを見出すであらう。……古里

の、は、その一葉、秋深う夕露暮れて、風無きにはるゝと散りつ  
 ……子をば生み子をば育て、愛へつゝ進まける女、母よ今何處  
 におはす……」と歌つて、亡き母上に捧げられたと言ふ事に、老  
 ひたる母を持つ吾々は、美しい感傷的な共鳴を見出したのである  
 東京、洛陽堂發行。一圓四十錢。(續田詩媛)

### 寄贈書籍雜誌

佛敎心理の研究  
 論理學

稿 惠 勝著 丙午出版社  
 述 水 泥著 岩波書店

壯丁讀本  
 哲學雜誌、心理研究、丁酉倫理會講演集、東洋哲學、六合雜誌、  
 神學之研究、禪學雜誌、學校教育、教育、內外教育評論、普通教  
 育、小學研究、教育研究、教育學術會、教育界、東京教育、京都  
 教育時報、兵庫教育、奈良縣教育、靜岡縣教育時報、越後教育雜  
 誌、滋賀縣教育雜誌、岐阜縣教育、三重教育、愛知教育雜誌、長  
 崎縣教育雜誌、都市教育、信濃教育、宮城縣教育會雜誌、滿洲界

世界心國家心個人心 大島正徳著 內外教育評論社  
 滅び行く宇宙及び人類 兒 玉 昌著 洛陽堂  
 神人論 ソロワイヨフ著 關竹三郎譯 全  
 田中義一著 寶文館

### 前 號 目 次

社會意識の成立	文學士 高田 保馬
普遍に就て	文學士 田 邊 元
精神物理的法則(承前)	文學士 千 葉 胤 成
社會的教育學の過去及將來(承前)	文學博士 小 西 重 直
學界近況—ユーベルエツヒ哲學史第四卷新版—リツケルト「認識の對象」第 三版	
彙 報—新著紹介	